

9/5 Thu.

第641回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.641 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
チェンバロ
Harpichord
コンサートマスター
Concertmaster

マクシム・エメリヤニチェフ -p.5

MAXIM EMELYANYCHEV

マハン・エスファハニ -p.7

MAHAN ESFAHANI

戸原 直
NAO TOHARA

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

序曲〈フィンガルの洞窟〉 作品26 [約10分] -p.10

Overture "The Hebrides", op. 26

スルンカ
SRNKA

チェンバロ協奏曲〈スタンドスティル〉 (日本初演)

[約23分] -p.11

Harpichord Concerto "Standstill" (Japan Premiere)

[休憩]
[Intermission]

シューベルト
SCHUBERT

交響曲 第8番 八長調 D944 〈グレート〉 [約48分] -p.12

Symphony No. 8 in C major, D 944 "The Great"

I. Andante – Allegro ma non troppo

II. Andante con moto

III. Scherzo : Allegro vivace

IV. Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成： 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

9/11 Wed.

第39回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.39 / Festival Hall 19:00

9/13 Fri.

第675回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.675 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
トランペット
Trumpet
コンサートマスター
Guest Concertmaster

マクシム・エメリヤニチェフ -p.5

MAXIM EMELYANYCHEV

セルゲイ・ナカリヤコフ -p.7

SERGEI NAKARIAKOV

伝田正秀 (ゲスト)
MASAHIDE DENDA

リムスキー=コルサコフ
RIMSKY-KORSAKOV

序曲〈ロシアの復活祭〉 作品36 [約14分] -p.14

Russian Easter Overture, op. 36

アルテュニアン
ARUTIUNIAN

トランペット協奏曲 [約17分] -p.15

Trumpet Concerto

[休憩]
[Intermission]

リムスキー=コルサコフ
RIMSKY-KORSAKOV

交響組曲〈シェエラザード〉 作品35 [約42分] -p.16

Scheherazade, op. 35

I. 海とシンドバッドの船

II. カランダール王子の物語

III. 若い王子と王女

IV. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

特別協賛： 非破壊検査株式会社 (9/11)

助成： 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

 独立行政法人日本芸術文化振興会 (9/13)

協力：コジマ・コンサートマネジメント (9/11)

※9/13公演では日本テレビの収録が行われます。

9/28 Sat.

第270回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.270 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

9/29 Sun.

第270回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.270 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor
チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.6
SEBASTIAN WEIGLE

エドガー・モロー* -p.8
EDGAR MOREAU

長原幸太
KOTA NAGAHARA

ウェーバー
WEBER

歌劇〈オベロン〉序曲 [約9分] -p.19
"Oberon" Overture

ブルッフ
BRUCH

コル・ニドライ 作品47* [約10分] -p.20
Kol Nidrei, op. 47

コルンゴルト
KORNGOLD

チェロ協奏曲 ハ長調 作品37* [約13分] -p.21
Cello Concerto in C major, op. 37

[休憩]
[Intermission]

コルンゴルト
KORNGOLD

シュトラウシアーナ [約6分] -p.22
Straussiana
I. Polka
II. Mazurka
III. Waltz

R. シュトラウス
R. STRAUSS

歌劇〈ばらの騎士〉組曲 [約22分] -p.22
"Der Rosenkavalier" Suite

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮

マクシム・エメリヤニチェフ

MAXIM EMELYANYCHEV, Conductor

若き才能が振る
〈グレート〉&
〈シェエラザード〉



©Andrej Grlic

古楽とモダン双方のオーケストラで高い評価を得ている鬼才エメリヤニチェフが、活気に満ちた新感覚の〈グレート〉と〈シェエラザード〉を披露し、鮮烈なデビューを果たす。

1988年、ロシア（旧ソビエト連邦）生まれ。ニジニ・ノヴゴロド音楽院で指揮を学んだ後、モスクワ音楽院でロジェストヴェンスキーに師事。12歳で指揮者としてデビューして以来、数々の楽団を指揮し、チェンバロ、ピアノの演奏でも活躍している。

2013年から古楽アンサンブル「イル・ポモ・ドーロ」、19年からスコットランド室内管それぞれの首席指揮者を務め、25年にスウェーデン放送響の首席客演指揮者に就任を予定している。これまでにベルリン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ロンドン・フィル、パリ管、ミュンヘン・フィル、エイジ・オブ・エンライトメント管などを指揮。23/24年シーズンには、バイエルン放送響、バーミンガム市響、ケルン放送（WDR）響、南西ドイツ放送（SWR）響、トロント響、フランス放送フィルなどへ初登場しており、24年8月にはザルツブルク音楽祭でザルツブルク・モーツァルテウム管へ客演した。

オペラでも活躍の場を広げており、チューリヒ歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、ジュネーヴ歌劇場などで〈皇帝ティートの慈悲〉や〈フィガロの結婚〉〈魔笛〉などを振るほか、グライントボーン音楽祭で〈リナルド〉などを指揮し、その手腕を発揮している。録音も数多く、J. デイドナートらと録音したヘンデルの〈アグリッピーナ〉はグラモフォン賞オペラ部門を受賞した。読響初登場。

9/5
定期

9/11
大阪定期

9/13
名曲

Maestro

9/28
土曜マチネー9/29
日曜マチネー

Maestro

指揮

セバ스티アン・ヴァイグレ
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

**陶酔的な究極の美
ヴァイグレが振る
〈ばらの騎士〉組曲**

©読響

オペラを得意とするドイツの名匠ヴァイグレが、〈ばらの騎士〉などを指揮してドラマティックに物語を紡ぐ。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれて注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ボリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈ダフネ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈ローエン格林〉〈タンホイザー〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。24年3月にはベルリン・ドイツ・オペラで〈スペードの女王〉を振り、好評を博した。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。



©Kaja Smith

チェンバロ

マハン・エスファハニ

MAHAN ESFAHANI, Harpsichord

「非凡なる才能」(タイムズ紙)、「繊細にして躍動的」(アーリーミュージック・トゥデイ誌)など絶賛され、時代の最先端を走る“チェンバロの革命児”。1984年テヘラン生まれ。スタンフォード大学で音楽学と歴史を学び、ボストンでP. ウォッチオン、ブラハでZ. ルージチコヴァにチェンバロを師事。2015年BBCミュージック・マガジン年間最優秀新人賞。セゲルスタム、ピエロフラーヴェク、ヴォルコフ、ヴィトラ名匠の指揮で、BBC響、ケルン・ギュルツェニヒ管、イングリッシュ・コンサート、ブラハ放送響、ベルゲン・フィルなどと共演。プーランク、マルティヌー作品から、B. ティーンやG. ブライアーズ、B. ソアンセンら現代作曲家の協奏曲も弾き、チェンバロの新たな可能性を追求している。22年、最年少でウィグモア・ホール・メダルを授与される。読響初登場。

世界屈指のトランペット奏者として活躍する名手。1977年生まれ。10歳でオーケストラと共演。デビューするや否や各地の新聞や雑誌で「素晴らしいスターの出現」と報じられ、一躍注目を集めた。ピアニストのキーシンやニコライエワと共演し、1991年ザルツブルク音楽祭にデビューして話題を呼んだ。92年のシュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭でダヴィドフ特別賞を受賞。15歳でテルデック・レーベルと専属契約を結んでCDデビュー。広範なレパートリーを誇り、数々の編曲作品を録音し、多くの賞を受賞。2002年にはドイツのECHO クラシック賞最優秀器楽奏者部門に選ばれた。これまでサンクトペテルブルク・フィル、BBC響、ハンブルク国立歌劇場管などと共演。ヴィトマンら現代作品の初演でも絶賛されている。読響初登場。



©Thierry Cohen

トランペット

セルゲイ・ナカリャコフ

SERGEI NAKARIAKOV, Trumpet

9/5
定期

Artist

9/11
大坂定期9/13
名曲

Artist

9/28

土曜マチネー

9/29

日曜マチネー

Artist



チェロ

エドガー・モロー

EDGAR MOREAU, Cello

ソヒエフら名匠が絶賛するフランスの新鋭チェリスト。1994年パリ生まれ。4歳でチェロを、6歳でピアノを始める。パリ国立高等音楽院およびドイツのクロンベルク・アカデミーで研鑽^{けんさん}を積む。2011年チャイコフスキー国際コンクールで第2位を獲得し、「若き俊英」として注目を浴びる。14年ヤング・コンサート・アーティスト国際オーディション第1位ほか受賞多数。これまでにゲルギエフ、ドゥダメルらの指揮で、ロンドン響、フィルハーモニア管、フランス国立管などと共演。カーネギー・ホールやウィーン楽友協会などで演奏するほか、モンペリエ音楽祭、ヴェルビエ音楽祭など世界各地の音楽祭に招かれている。ワーナー・クラシックスなどから多数の録音をリリース。使用楽器は1711年ダヴィッド・テヒラー製チェロ。読響初登場。

メンデルスゾーン

序曲〈フィンガルの洞窟〉 作品26

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）の両親は、息子の国内での成長を見守ったうえで、見聞をいっそう広めて欲しいとの思いから、彼に遊学を勧めた。

1829年4月10日、ロンドンからメンデルスゾーンの旅が始まる。当地でいくつかの演奏会に出演した後、7月30日にエディンバラを訪問。ここで交響曲第3番〈スコットランド〉の着想を得た。

ブリテン島の北部を周遊する中、8月7日にはスタファ島に立ち寄るべく汽船に乗る。この島の名勝「フィンガルの洞窟」を観るためだ。作曲家はここで、序曲〈フィンガルの洞窟（ヘブリディーズ諸島）〉の作曲を思いついたという。

ベルリンに戻ったのが12月7日。8か月に及ぶ旅行でメンデルスゾーンは、アウトプット／インプットの両面とも充実した時間を過ごした。

彼の“グランドツアー”はここで終わらない。ゲーテの勧めにしたがい1830年6月、今度はイタリアに向けて出発した。メンデルスゾーンはその年の冬、滞在先のローマで〈フィンガルの洞窟〉を書き上げ、交響曲第4番〈イタリア〉にも着手する。その後、スイスを経て31年10月にドイツに帰国した。

旅はまだまだ続く。同年の冬をパリで過ごし、32年の春にはロンドンを再訪。ここで〈フィンガルの洞窟〉を初演する。メンデルスゾーンはこの作品を旅の中で産み、育て、世に出したというわけだ。イギリスから帰ったのがこの年の初夏。これにて作曲家は武者修行を終えた。

前のめりに船を漕ぐような第1主題を、波のようにうねる音型が下支えする。やがてチェロ声部に現れる大らかな旋律が第2主題。これらの要素を展開部でさまざまに変化させ、情緒の揺れ動きを表現する。この展開部の巧みさに、若き作曲家の才能がきらめく。再現部で各要素を違った角度（オーケストレーション）で迎ったのち、結尾部で旅の印象を改めて噛みしめ、余韻を残しつつ曲を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1829～30年（改訂：1832年6月）／初演：1832年5月14日、ロンドン／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

スルンカ

チェンバロ協奏曲〈スタンドスティル〉（日本初演）

プラハに生まれたミロスラフ・スルンカ（1975～）は、2004年ごろから創作活動を本格化させ、2016年に書いた歌劇〈南極〉により、国際的な名声を確固たるものとした。作曲家は2018年に、チェンバロ独奏のための〈トリガリング〉（「銃の引き金を引くこと」、転じて「電算機を駆動させること」の意）を書き、この楽器との邂逅を果たす。〈トリガリング〉の作曲にあたりスルンカは、チェンバロを次のように理解した。

「（この楽器は）音の高さと長さが前面に出る」「その響きは（解説者註：同じキーを打鍵し続ける場合、ピアノとは異なり）音色と音量の点で、いかなる変化も実現できない」「チェンバロの発音機構は0か1かでデジタル的だ（中略）その0と1との間、つまり奏者が鍵盤を押し下げ、プレクトラムが弦をはじく、そのプレッシャーの高まる瞬間は特別である」「そのメカニズムが、響きをまさに『トリガー』する」

チェンバロ協奏曲にもこうした作曲家の考えが色濃く反映されている。単一楽章のこの作品は「スタンドスティル」（停止、行き詰まりの意）なる副題を持つ。スルンカはこの曲で、チェンバロの“トリガー機構”の「行き詰まり＝最終地点」を示そうとしているのかもしれない。

スルンカの基本的なアイデアは、チェンバロと管弦楽の各楽器を、すべてその減衰の速さ（音を保持する時間の長短）で整理しなおそう、というもの。チェンバロやパーカッションは短い音、管楽器やピアノはそれよりは長い音（と短い音）、弦楽器やアコーディオンは延々と伸びる長い音（と短い音とそれよりは長い音）が出せる、といったように。そこに、上行音型と下行音型との相剋を埋め込み、作品の柱とする。チェンバリストは終結部のカデンツァを、不確定の楽譜（五線を基礎に置いた図形楽譜）に基づいて演奏する。その行き着く先に「スタンドスティル」が示唆される。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2019～22年／初演：2022年9月11日、ケルン／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート2（アルトフルート持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、打楽器（サスペンデッド・シンバル、マリimba、ヴィブラフォン、木魚、ホビーグラ、ゆで卵カッター）、ピアノ、アコーディオン、弦五部、独奏チェンバロ

シューベルト

交響曲 第8番 八長調 D944 〈グレート〉

1825年の初夏から晩秋にかけて、シューベルトは長い旅をした。5月にウィーンを出発、ザルツブルクを目指す行程だが、夏の盛りはグムンデンに2か月、ガスタインに1か月、長逗留した。旅先でリラックスしたせいも、創作の筆も滑らかだった。友人オッテンヴァルトによると、シューベルトは「何曲かリートを作曲し(中略)それから、グムンデンで交響曲を1曲、書いた」という。

ところがこの作品は以後、こつぜんと姿を消す。見つかったのは、作曲家が世を去って10年ほど過ぎたころ。発見者はロベルト・シューマンだ。シューマンは1839年1月1日、ウィーンにシューベルトの墓を詣でた足で、その兄フェルディナントを訪ねた。そこで未出版の八長調交響曲を見出し、すぐさま盟友フェリックス・メンデルスゾーンに楽譜を送る。メンデルスゾーンは同年3月21日、ゲヴァントハウス管弦楽団を指揮して同曲を初演。こうして、長らく忘れられていた大作が、その姿を現すこととなった。

第1楽章冒頭から第8小節までに、交響曲全体を形作るおおむねすべての韻律(リズム要素)、すなわち「長短短(タータタ)」「長短長(タータター)」「短短短長(タタタター)」が姿を現す。

第2楽章の主題は、前楽章序奏のテーマに見る「長短短」の変奏。以下、大きく二つの部分が交互にABABAと続いていく。

第3楽章がすこぶる長く感じるのは、繰り返しが多いせいもあるが、むしろ第1楽章に由来する韻律を、あの手この手で何度も使うからでもある。

第4楽章冒頭のリズムも第1楽章序奏の韻律を転用したものだ。この交響曲は作品が進むほど、第1楽章の韻律が濃縮していく仕組みになっている。実際の時間に比べて、音楽的な時間が濃密かつ長大に感じられるのは、そのせいだ。シューマンはこの作品を「天国的な長さ」と評した。それはまさに、この仕組みを感知した同業者による、美しい比喩だった。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1825年／初演：1839年3月21日、ライプツィヒ／演奏時間：約48分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

リムスキー＝コルサコフ 序曲〈ロシアの復活祭〉 作品 36

ロシアの軍人貴族の家系に生まれたニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）は、海軍士官学校時代（1856～62）にミリィ・バラキレフ（1837～1910）と知り合い、ロシアの国民楽派「五人組」の一員となった。バラキレフの指導のもと交響曲第1番（1861～65）を書き始めるが、未完のままで士官候補生として遠洋航海に出発するなど、海軍軍人の職務を果たしながら作曲を続けていた。やがて創作に専念するようになり、1871年にペテルブルク音楽院教授に就任する。専門的な音楽教育は受けていなかったにもかかわらず、豊かな才能を開花させ、管弦楽法の大家としてロシア内外の作曲家に大きな影響を与えた。

1888年夏、リムスキー＝コルサコフの代表作となる2作品が続けて作曲された。交響組曲〈シェエラザード〉と序曲〈ロシアの復活祭〉である。〈ロシアの復活祭〉は、ロシア正教の一般向け聖歌集『オビホード』からの旋律に基づく演奏会用序曲で、作曲者は「キリスト受難の陰鬱で神秘的な土曜日の午後から、復活祭の日の解放感あふれる異教的歓喜への転換」（『わが音楽の年代記』）を表現したかったと記している。その数年前（1883～84年）、バラキレフが帝室礼拝堂合唱団の音楽監督に任命された際、リムスキー＝コルサコフは副監督を務めた。そのときのロシア正教の礼拝式での経験や、鐘の音で有名なノヴゴロド近郊の「チフヴィン修道院の近所で過ごした幼少期の印象」などもここに反映されている。作曲家自身の指揮で初演され、作品は、「五人組」の仲間で、すでに亡くなっていた「ムソルグスキーとボロディンの思い出に」捧げられた。

楽曲（レント・ミスティーク）は、木管楽器の厳かな主題から始まる。これは、聖歌集の「主を呼び起こそう」に基づき、この後もたびたび登場する。快活な主部（アレグロ・アジタート）は、トロンボーンによる威厳に満ちた楽想や鐘の音を思わせる響きなどをはさみ、祝祭感に満ちた華やかな音楽が繰り広げられる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1888年／初演：1888年12月3日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約14分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、銅鑼）、ハープ、弦五部

アルテュニアン トランペット協奏曲

アレクサンドル・アルテュニアン（1920～2012）は、アルメニアの首都エレバンに生まれた。アルメニア人の作曲家と言えば、アラム・ハチャトゥリアン（1903～78）が有名だが、アルテュニアンは彼よりひと世代若い作曲家である。エレバン音楽院で作曲とピアノを学び、1944年にモスクワ音楽院に入学。卒業後、アルメニアに戻り、65年からエレバン音楽院で教鞭を執った。アルメニアの民俗音楽や、アゼルバイジャンの吟遊詩人アシューゲの即興性の影響を受けた民族主義的な作風の作品で知られ、ソ連国家賞（1949）やアルメニア国家賞（1971）などを受賞した。

トランペット協奏曲はもともと、アルテュニアンの若い頃からの友人で、アルメニア・フィルの首席トランペット奏者のために書かれるはずだった。しかし、彼が第二次世界大戦で戦死して作曲が中断。1949年に再開され、翌年に完成。ソ連のトランペット奏者によってモスクワで初演された。その後、この作品が20世紀を代表するトランペット協奏曲となったのは、超絶技巧を誇るウクライナ出身のトランペット奏者、ティモフェイ・ドクシツェル（1921～2005）の演奏と録音に依るところが大きい。多くの尊敬を集めた彼の演奏（ナカリヤコフも刺激を受けたひとり）によって、世界的に知られる作品になった。

全体は3つの部分から構成され、切れ目なく演奏される。ゆるやかな序奏（アンダンテ）は、独奏トランペットが力強く登場し、憂いを帯びた旋律を奏する。主部（アレグロ・エネルジーコ）は、オーケストラの活気ある音楽に続いて、快活な第1主題がトランペットで示される。第2主題はアルメニアの民俗音楽の叙情的な性格が表れている。ノクターン風の静かな中間部（メノ・モッツ）は、独特の色彩を放ち、クラリネットに導かれ、トランペットが民謡風の旋律を歌い上げる。快活な部分（テンポ・プリモ）が戻り、第1主題が華やかに再現される。最後のカデンツァは、ドクシツェル作の技巧的なものが演奏されることが多い。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1949～50年／初演：1950年、モスクワ／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル）、ハープ、弦五部、独奏トランペット

リムスキー＝コルサコフ 交響組曲〈シェエラザード〉 作品35

リムスキー＝コルサコフは、管弦楽法の大家として知られるが、その手腕は編曲等においても発揮され、かつての「五人組」の仲間の作品を^{よみがえ}甦らせた。ムソルグスキーの交響詩〈はげ山の一夜〉のオーケストレーションや歌劇〈ホヴァンシチナ〉の補筆、ボロディンの未完の歌劇〈イーゴリ公〉も、グラスノフと一緒に完成させた。

こうした作業を通じて、新たな作品のアイデアを得ることもあった。1888年に作曲された交響組曲〈シェエラザード〉は、〈イーゴリ公〉の補筆作業を手がけるなかで着想された。どちらも東洋風の異国情緒に^{あふ}溢れ、雄大さと力強さが広がり、両作品の主題の共通性を指摘する音楽学者もいる。リムスキー＝コルサコフは、『千夜一夜物語（アラビアン・ナイト）』を題材に、全体の構成を立てた。「女性に不信の念を抱くシャリアール王は、毎夜、女性と一夜を共にしては翌朝、殺害してきた。新しく妃になるシェエラザードは、千一夜の間、不思議な物語を聞かせ続け、王に残忍な考えを捨てさせた」という筋書きだ。そして、初演の際に作曲者が楽団員に説明した内容などから、それぞれ第1楽章「海とシンドバッドの船」、第2楽章「カランダール王子の物語」、第3楽章「若い王子と王女」、第4楽章「バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲」といったタイトルをもつと考えられている。

音楽は、2管編成にもかかわらず、見事なオーケストレーションで^{げんらん}絢爛豪華に鳴り響く。第1楽章のシャリアール王とシェエラザードの主題は、循環主題として各楽章に現れ、第1楽章と終楽章の海の描写には、海軍時代の経験が生かされた。

第1楽章 ラルゴ・エ・マエストロ 荒々しい響きのシャリアール王の主題で始まり、続いて独奏ヴァイオリンが優美なシェエラザードの主題を奏でる。主部（アレグロ・ノン・トロppo）は、波打つ海の様子が描かれ、フルートによるシンドバッドの主題が現れる。海は大きくうねりをあげ、シャリアール王やシェエラザードの主題も現れる。

第2楽章 レント 冒頭の独奏ヴァイオリンのシェエラザードの主題が、新たな物語の開始を伝える。カランダール王子の主題（アンダンティーノ）は、ファゴットで

滑稽な表情を見せながら示される。金管楽器の鋭いファンファーレ（アレグロ・モルト）で緊迫感が増すが、やがてカランダール王子の主題とともに陽気な音楽が戻ってくる。

第3楽章 アンダンティーノ・クワジ・アレグレット 若い王子と王女の夢見るようなロマンティックな音楽。主部は弦楽器が官能的な美しい旋律を歌い、中間部は小太鼓のリズムにのせてクラリネットが快活な主題を示す。作曲者によれば、後半は独奏ヴァイオリンのための楽章で、華やかな技巧が披露される。

第4楽章 アレグロ・モルト シャリアール王の主題が戻り、シェエラザードの主題が続く。賑やかな祭りの様子が描かれ、これまでの楽章の主題が回想される。第1楽章の海の情景が再現され、嵐に襲われ船は難破する。最後は、優しく語りかけるシェエラザードの主題にシャリアール王の主題が重なり、締めくくる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1888年／初演：1888年11月3日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約42分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、銅鑼）、ハープ、弦五部

9/28
土曜マチネー

9/29
日曜マチネー

Program Notes

ウェーバー 歌劇〈オベロン〉序曲

カール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）は指揮者としてプラハやドレスデンの歌劇場の楽長を務めつつ、作曲家として当時主流だったイタリア風のオペラとは異なるドイツ独自のオペラの在り方を模索した。その成果が魔物の住む深い森を舞台とした民間伝説に基づく〈魔弾の射手〉（初演：1821）である。

この作品の成功によりウェーバーは国際的な名声を勝ち得、1824年にはパリとロンドンから新作オペラの依頼を受ける。ウェーバーは条件の良かった英コヴェント・ガーデンの仕事を引き受け、本作〈オベロン、または妖精王の誓い〉（台本：ジェームズ・ブランチュ）に取り掛かった。当時、ウェーバーは結核を患って死期も悟っていたために、作曲は急ぎ進められた。

オペラは妖精の国の王オベロンとその妻が、男女の愛について口論するところから始まる。オベロンは熱愛するカップルを妻との和解に使おうと考え、騎士ヒュオンに魔法の角笛を与える。ヒュオンはバグダッドやチュニスなど異国の地を渡り、魔法の角笛で困難を乗り越え、最後は美女レツィアと結ばれる。

本作が完成するとウェーバーはロンドンに移り、1826年4月12日に自らの指揮で初演、成功を収めたものの、その2か月後には同地で帰らぬ人となった。台本に難があるためか、今日オペラ本編が上演されることは稀だが、オペラのモチーフを巧みに結び付けて作られた序曲は重要なレパートリーとなっている。

角笛を表すホルンの独奏で始まる序奏部では、桃源郷のような妖精の国が描かれる。トゥッティ（総奏）による打撃の後、アレグロ・コン・フォーコにテンポを速め、激しく躍動する快活な主題がヴァイオリンに出る。角笛のテーマを繰り返した後、クラリネットが柔らかな主題を出し、弦が反復してさらに跳躍が印象的な新しい主題を奏でる。これらはそれぞれヒュオンとレツィアのアリアから取られている。

（江藤光紀 音楽評論家）

作曲：1825～26年／初演：1826年4月12日、ロンドン／演奏時間：約9分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

9/28

土曜マチネー

9/29

日曜マチネー

Program Notes

ブルッフ

コル・ニドライ 作品47

マックス・ブルッフ(1838～1920)は第一次世界大戦後まで創作活動を続けたが、作風は保守的なロマン派の範疇^{はんちゆう}にあり、とりわけ豊かな歌謡性を強みにしている。ベルリン王立アカデミーの中心^{ちゆうしん}的な地位に就くなど、生前は教育面でも大きな影響力を持ち、山田耕筰も留学時にブルッフに学んでいる。

〈コル・ニドライ〉は1880年、リヴァプールのフィルハーモニック・ソサエティに監督として赴任した年に書かれた。この年には結婚もしており、公私ともに軌道に乗ってきた時代である。ヴァイオリン協奏曲第1番(1866)の成功によって国際的に知られるようになったブルッフにはチェロの独奏曲を望む声も多かったが、結局ヨアヒム・カルテットのチェロ奏者であったロベルト・ハウスマンのアドバイスを受けながら、このジャンルの新曲を書き進めることになった。ちなみにハウスマンはブラームスの二重協奏曲をヨアヒムと初演するなど、同時代の代表的なチェロ奏者であった。

〈コル・ニドライ〉は二つのユダヤの旋律を用いているが、ブルッフ自身はプロテスタントであった。この曲の前の作である〈スコットランド幻想曲〉が同地の民謡を素材にしているのと同様、ユダヤの旋律はあくまでも素材に過ぎず、語法的には明らかにロマン派の管弦楽曲なのだが、この曲があまりにも知られてしまったために、ブルッフの作品は後年ナチスによって演奏禁止の憂き目にあう。

曲は二つの部分からなる。弦の静かな序奏に続いて、チェロが哀愁^{あいきゆう}を湛^{たた}えた旋律を歌う。これはユダヤ教の祭日ヨム・キブル^{しよくびい}(贖罪の日)に歌われる聖歌〈コル・ニドレ〉である。ハーブの柔らかな分散和音が入ると雰囲気^{ふんぎ}が穏やかになり新しい主題が出るが、これはイギリスの詩人バイロンのアイザック・ネイサンが作曲した「ああ!バベルの流れの傍らで泣いた彼等のために涙せよ」の旋律である。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲: 1880年/初演: 1881年、ベルリン/演奏時間: 約10分

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、ハーブ、弦五部、独奏チェロ

コルンゴルト

チェロ協奏曲 八長調 作品37

エーリッヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト(1897～1957)の才能は幼少期から専門家の賛辞を浴び、1920年、23歳で完成させたオペラ〈死の都〉が大ヒットするとウィーンを代表する作曲家と目されるようになる。30年代にはオペラで培った手法を映画音楽に応用してハリウッドで高い評価を受け、アメリカとウィーンを往復する日々を過ごす。しかし38年にナチスがオーストリアを併合すると、ユダヤ人であったコルンゴルトはそのままアメリカに亡命、このジャンルの大家として知られるようになる。戦後はヨーロッパでの復権を試みるが、後期ロマン派的な作風が時代遅れとみなされ、また映画=商業音楽のイメージも災いして、生前は純音楽での成功のチャンスには恵まれなかった。

コルンゴルトの作品のうち現在、最も愛奏されているのは1945年に完成されたヴァイオリン協奏曲だが、これは過去の自作の映画音楽の素材を再構成したものである。これに対し、翌年に完成させたチェロ協奏曲は、『愛憎の曲(原題: Deception)』という一つの映画作品に基づいている。これは女性ピアニストを巡る作曲家とチェリストの三角関係の話で、本作はBGM的に用いられるだけでなく、劇中にもリハーサル(中間部の2分ほど)や本番(冒頭と最後のカデンツァ以降を計約5分間)の様子が組み込まれ、物語上重要な役割を果たしている。

曲はオーケストラの短い序奏の後、すぐに独奏チェロが第1主題を歌いだす。目まぐるしい転調や多彩な音色の変化、主題を対位的にたたみかけていく手法にはコルンゴルトらしい才気が溢れている。ややあって幅広い跳躍をもった叙情的な第2主題をチェロが出す。第1主題に基づくチェロのカデンツァを経てレントにテンポを落とすと、物悲しい幻想曲風^{ぼくせしい}の中間部に入る。やがて第1主題が回帰して多彩に展開され、技巧的なカデンツァを経て堂々と結ぶ。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲: 1946年/初演: 1946年12月20日、ロサンゼルス/演奏時間: 約13分

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン、マリニバ、ヴィブラフォン、銅鑼)、ハーブ、ピアノ、チェレスタ、弦五部、独奏チェロ

9/28

土曜マチネー

9/29

日曜マチネー

Program Notes

9/28

土曜マチネー

9/29

日曜マチネー

Program Notes

コルンゴルト シュトラウシアーナ

〈シュトラウシアーナ〉は1953年に学生オーケストラ用の小品として楽譜出版社の依頼で書かれた。ウィーン出身の作曲家として、コルンゴルトはヨハン・シュトラウス2世の音楽に深い愛着を感じており、過去には〈こうもり〉をはじめとするオペレッタの編曲なども手掛けている。本作はそうしたシュトラウスの作品から〈ニネット侯爵夫人〉〈ウィーンのカリオストロ〉〈騎士パズマン〉の旋律を引用して、弾むような「ポルカ」、優雅で美しい「マズルカ」、堂々とした気品を湛えた「ワルツ」の三つの楽章にまとめた。「ポルカ」の原曲は「新ピッツィカート・ポルカ」として知られておりご存じの方も多だろうが、コルンゴルトが原曲にどれだけ美しい化粧を施しているかが分かるだろう。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1953年／初演：1953年11月22日、イングルウッド／演奏時間：約6分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ、クラリネット2、ファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロックンシュピール）、ハーブ、ピアノ、弦五部

R. シュトラウス 歌劇〈ばらの騎士〉組曲

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）はミュンヘンの宮廷歌劇場のホルン奏者を父に持ち、作曲・指揮の両面において早くから才能を発揮した。20代から30代にかけて交響詩を次々と発表して一躍人気作曲家になるが、関心領域を次第にオペラへ移し、過激で先鋭的な〈サロメ〉（1905）で最初の成功を収めた。情痴のもつれや殺人といった生々しい主題を大規模な管弦楽を用いて表現する方向性は、次の〈エレクトラ〉（1908）でも追求される。

しかし〈ばらの騎士〉（1910）では、前作の退廃性は没落する貴族の回顧的な気分へと、エロスは身分社会での不倫や恋愛騒動へと変わる。これは台本のフーゴー・フォン・ホフマンスタールとの協業の成果でもあり、本作で二人は徹底的に議論しながら、モーツァルトのプッファのような音楽劇を目指したのである。その娯楽性

は初演時から大評判を呼んで、ウィーンから初演地であるドレスデンへの臨時列車が組まれたほどであった。

あらすじは次のようなもの。元帥夫人が若い伯爵オクタヴィアンとの逢瀬^{おうせ}を楽しんでいると、いとこのオックス男爵がやってきて、豊かな商人の娘ゾフィーと結婚することになったので、ばらの騎士（婚約を申し込むための使者）を紹介してほしいと頼む。小間使いマリアンデルへと女装していたオクタヴィアンにちょっかいを出すオックスに、悪戯心^{いたづら}を起こした元帥夫人はオクタヴィアンを推薦する（第1幕）。オクタヴィアンは婚約のしるしである銀のばらをゾフィーに届けるが、二人はたちまち惹かれあってしまう。そこに到着したオックスは傍若無人な言動を繰り返し、憤慨したオクタヴィアンともみ合いになってオックスは負傷する。オクタヴィアンが騒動を詫^わびてその場を去ると、落ち着きを取り戻したオックスのところ、小間使いマリアンデルから密会の手紙が届く（第2幕）。密会はオクタヴィアン自らが仕掛けた罠^{わな}だった。オックスはまんまと策略にはまり面目を失って退場。身を引くことを決心した元帥夫人がオクタヴィアンにその気持ちを伝えると、オクタヴィアンとゾフィーは愛を誓う（第3幕）。

〈ばらの騎士〉組曲はニューヨーク・フィルの指揮者だったアルトゥール・ロジンスキがオペラから聴きどころを一つにつなげて交響詩風に編みなおしたもの。ホルンの咆哮^{ほうこう}にめくるめくような弦のメロディーが続く開始部はオペラ冒頭の元帥夫人とオクタヴィアンの情事の音楽。続いて第2幕の銀のばらを渡す場面が続く。フルートやチェレスタが表現するきらきらとしたばらの輝きが印象的だ。第2幕の大騒ぎの場面に負傷したオックスが機嫌を直して踊る有名なワルツが続くが、これはヨーゼフ・シュトラウスのメロディーを範にしている。そこから第2幕の最初の部分を少し聞かせて、オペラの結末部の元帥夫人、オクタヴィアン、ゾフィーらが歌う三重唱や二重唱につなぐ。最後に第3幕の居酒屋の場面でのオックスにちなんだもう一つのワルツに盛大なコーダを続けて全曲を閉じる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1910年（原曲）、1944年（組曲版）／初演：1944年10月5日、ニューヨーク／演奏時間：約22分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロックンシュピール、ラチェット）、ハーブ2、チェレスタ、弦五部

9/28

土曜マチネー

9/29

日曜マチネー

Program Notes